論文

『王統明鏡史』第４章・第５章にみる六字真言の字義・功徳・表象とその宗教的・思想的背景

――チベットにおける観音信仰の受容と変容――

Meaning, Merit, and Representation of the Six-syllable Formula in Chapters 4 and 5 of the *rGyal rabs gsal ba'i me long* and its Religious and Ideological Background: Acceptance and Metamorphosis of the Cult Avalokiteśvara in Tibet

佐久間　留理子*
SAKUMA Ruriko

The introduction of Buddhism to Tibet and narratives of the founding King Srong btsan sgam po are described in a plot of enlightenment by the Bodhisattva Avalokiteśvara in *rGyal rabs gsal ba'i me long* (the Mirror Illuminating the Royal Genealogies), written by the Tibetan monk bSod nams rgyal mtshan in the 14th Century. We examine how the cult of Avalokiteśvara was accepted and metamorphosed in the *rGyal rabs gsal ba'i me long*. Among this work's 18 chapters, chapters 4 and 5 especially refer to the Six-syllable Formula that details the essence of Avalokiteśvara. Therefore, these chapters are worth attention while comparing the cult of Avalokiteśvara in India with that in Tibet.

キーワード：チベット仏教（Tibetan Buddhism）、六字真言（The Six-syllable Formula）、ソンツェン・ガンポ王（King Srong btsan sgam po）

１．はじめに

(1) 研究の目的

14 世紀のチベット仏教サキャ派の学僧ソナム・ゲルツェン (bSod nams rgyal mtshan)が著した『王統明鏡史』(*rGyal rabs gsal ba'i me long*) (*GLR*) には、チベットにおける仏教伝来と建国王ソンツェン・ガンポの物語等が、観音菩薩の教化という筋書きで説かれている。本稿では、観音の精髄とされる六字真言「オンマニペメフン」[1)]の字義・功徳・表象（姿・図像）に着目し、インドで成立した観音信仰が、チベットで著された *GLR* において如何に受容され変容したのかという点について考察する。*GLR* の全 18 章の中、第 4 章・第 5 章は、とりわけ六字真言に関する内容を詳しく述べており、インドの観音信仰と比較する上で注目される。

なお、インド・チベットでは「観音」は、一般に「観自在」（梵語（Skt.): Avalokiteśvara, チベット語（Tib.): spyan ras gzigs dbang phyug）、もしくは「世自在」（Skt. : Lokeśvara, Tib. : 'jig rten dbang phyug）と呼ばれる。本稿では原則として「観音」の名称を用いるが、必要に応じて、「観自在」、「世自在」の名称も使用する。

(2) 研究の背景

本稿は、2021 年度科学研究費助成事業・基盤研究（B）（一般）「チベットにおける観音信仰の受容と変容：『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」（課題番号 21H00476）（研究代表者　佐久間留理子）による研究成果の一部である。また、日本宗教学会・第 80 回学術大会（2021 年 9 月 7 日）における「チベットの観音信仰―『王統明鏡史』における六字真言―」と題する口頭発表の内容を大幅に加筆、修正したものである。さらに、本稿は、本学開講科目の「宗教学」、「哲学」の授業におい

* 大阪観光大学観光学部/宗教学

て、チベットの宗教・仏教思想に関する資料として活用する予定である。

(3) 資料解説、及び研究の方法と独自性

GLR のテキストは、北京・民族出版社の活字本（チベット文字）（*GLR* (2)）を底本とし、クズネツォフ（Kuznetsov）の校訂本（*GLR*(1)）を適宜参照した。また、内容の概説や和訳に際しては、英訳の Sϕrensen (1994) と和訳の今枝(2015)を参照した。一方、*GLR* と比較する資料として、インドで成立し、チベット語訳された以下の①から⑤の経典等を用いる。

①『法華経』(*Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*)(*Sp*)の「普門品」は、梵語原典『法華経』では第 24 章、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(『大正新脩大蔵経』no.262）では第 25 章に相当するとともに、2 世紀後半までには成立していたと考えられている(久保, 1987,p.6)。

②『無量寿経』(*Sukhāvatīvyūha-sūtra*)(*Sukh*) は、『仏説阿弥陀経』とともに、140 年頃に成立したと推定されている(中村・早島・紀野, 2020)。チベット語訳は、『西蔵大蔵経』に、『大宝積経』第五会として収録され、「聖なるアミターバの荘厳と名づけられる大乗経」(*'phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*)と呼ばれる(藤田,2015,pp.25-28;*Sukh*(T))。また、現存の漢訳には五種あり、その中、康僧鎧訳『仏説無量寿経』(『大正新脩大蔵経』no. 360）が最も流布した（藤田, 2015, pp. 29-30)。

③『カーランダ・ヴューハ経』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*) (*KV*)は、7 世紀初頭に西北インドで成立したと考えられている(*KV*(3), p. 9)。六字真言の功徳を宣伝するとともに、輪廻世界の生類を救う観音の説話を多数収録する(岩本,1978,pp.143-149;佐久間,2013,2019,2021;Studholm, 2002)。梵文には、ギルギット写本のヴァージョン（*KV* (3))とネパール写本のヴァージョンがある（*KV* (1), *KV* (2))。また、9 世紀前半にチベットで編纂された『デンカルマ目録』[2)]や『パンタンマ目録』[3)]に*'Phags pa za ma tog bkod pa'i mdo* の名称で記載され、『西蔵大蔵経』に収録される（*KV* (T1), *KV* (T2))。さらに、漢訳には、天息災訳『仏説大乗荘厳宝王経』(『大正新脩大蔵経』no. 1050）がある。

④『サーダナ・マーラー』(成就法曼)（*Sādhanamālā*) (*SM*)は、インドにおいて 12 世紀頃までに個別に成立していた成就法（密教的観想法）を一つにまとめた集成である。バッタチャルヤ校訂本（*SM*(1)）によれば、312 種の成就法類が収められる。その中には、六字真言を神格化・表象化した六字観音の成就法類が四種類含まれており（*SM* (1), nos. 6, 7, 11, 12, pp. 26-30, pp. 34-36; *SM* (2), 4. 1-4. 4, pp. 65-79)、それらは、チベット語訳されている（佐久間, 2011, pp. 340-363; *SM* (2), 4.1 (T1)-4.4 (T3), pp. 191-208)。なお、本稿では *SM* (2) を底本として使用した。

⑤ 伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼 経 』一巻（『千手経』（Ch.)）(野口, 2000) には、梵語原典が存在したと考えられるが、現存していない。訳者は西インド出身とされ、唐時代に中国に入国した（鎌田、他, 1998, p. 850)。中国・朝鮮・日本において広く流布するとともに、法成（chos rgrub）によって漢訳からチベット語に翻訳された(岩本, 1978, pp. 153, 158)（『千手経』(T1), (T2))。

本稿では、以上の五種の資料と *GLR* 第 4 章・第 5 章とを比較し考察する。先行研究では、*GLR* と *KV* との関係については、Sϕrensen, Per K. (1994, pp. 102-105）が英訳註において部分的に言及するのみである。また、*GLR* と『千手経』との関係については、石濱（2010, p. 388）が簡単に指摘するのみである。従って、以上の資料を用いた総合的な比較研究はこれまでに無く、その点で本稿は独自性を有する。

2．第 4 章・第 5 章とその宗教的・思想的背景

(1) 『王統明鏡史』の構成と第 4 章・第 5 章の位置付け

序文では、六字真言と観音に対する敬礼文等が収録される。本編の全 18 章の中、第 1 章から第 8 章までは、ソンツェン・ガンポ王が出現するまでの導入部であり、また、第 9 章から第 17 章までは、ソンツェン・ガンポ王の物語であり、さらに、第 18 章は、ソンツェン・ガンポ王の孫のマンソン・マンツェン王以降の王統の説明である。

第 1 章では、宇宙の生成、神（天）と人の展開、インドの王統、釈迦の生涯、仏教の存続期間等が述べられ、仏教世界観が説明される。また、第 2 章では、ブッダの

法身塔、報身像、応身像の建立、ブッダガヤでのお堂の建立と仏像の安置、中国への仏像の贈与等が述べられ、インドにおける仏教の興隆と中国への仏像の伝来が説明される。さらに、第 3 章では、中国・西夏・モンゴルへの仏教の教えの流布、及びそれらの国々の王統が述べられる。

以上の三つの章には、六字真言や観音に関する内容はみられない。第 4 章において、六字真言や観音が初めて物語の中に登場する。第 4 章・第 5 章に説かれる六字真言や観音の表象は、第 9 章以降の章においても言及され、*GLR* 全体の筋書きにおいて重要な役割を果たしている。

（2）第 4 章の構成と宗教的・思想的背景

1） 第 4 章の構成

本章には、概ね次のような筋書きがみとめられる。

その昔、釈迦仏が弟子たちに囲まれていた時、釈迦仏の眉間の白毫より五色の光が放たれ、チベットに到達した。それを見て微笑んだ釈迦仏に、除蓋障菩薩がその理由を尋ねた。それに対し、釈迦仏が答えるところから第 4 章が始まる。

釈迦仏は、かつて観音が千の仏陀の前で行った誓願、即ち三世（過去・現在・未来）の仏陀によっても教化されなかったチベットの生類を解脱と菩提の道に入るように導くというもの、について述べ、その誓願の力によって将来チベットを教化する観音が誕生することを予言する。釈迦仏がこれを説き終わると、その胸から白い光が放たれ、西方の極楽浄土に到達し、阿弥陀仏の胸に入った。次に、その阿弥陀仏の胸から光が放たれ、浄土にある蓮の咲く湖に溶け込んだ。この湖には、「最勝王」という名の護法王がおり、家来とともに、湖中の千の花弁のある大きな蓮に供物を供えて祈った。すると蓮の花托が割れ、「化生」という忽然と生まれる方法で四臂を有する観音が現れたとされる。これに続いて、阿弥陀仏の予言、六字真言の功徳、阿弥陀による観音の灌頂・加持が説かれる。

以上のように、釈迦仏から発する光の放出とその伝達によって、釈迦仏の威力が浄土の阿弥陀仏へ、さらに、阿弥陀仏から浄土の湖へと伝わり、護法王による供養を契機として仏陀の化身である四臂観音が湖にある蓮の中に出現して物語が展開する。

2） 阿弥陀浄土と四臂観音

第 4 章には、阿弥陀浄土における蓮華に「化生」（rdzus skyes）の方法で出現した四臂を有する観音の姿が、次のように説かれる。なお、和訳のカッコ［　］内の語は、筆者が補った。また、原文は和訳の後、カッコ（　）内に掲載した。（以下同）

> 「[観音は] 金剛跏趺坐（結跏趺坐）[の座り方] で両足を組み座っている。一面四臂であり、最初の二臂は胸前で合掌している。残りの二臂は、右手で白い水晶の数珠を、左手で白い蓮華を握り、それが耳の側で開花している。[偉大な人物が具える]身体的特徴を有し、種々の宝石で飾られ、様々な[色の]絹でできた衣をまとっている。身体の色は、雪山の頂きに輝く朝日［の色］に似ている。鹿皮は、左肩に掛かり胸を覆っている。[髪は] 五つの髷を結い、頭は宝石で飾られている。微笑して喜ぶ」（今枝, 2015, p. 59; Sφrensen, 1994, pp. 100-101）。

> (zhabs gnyis rdo rje skyil dkrung du bzhugs pa/ zhal gcig phyag bzhi pa/ dang po gnyis thugs kar (*GLR* (1): khar) thal mo sbyar ba/ g'yas kyi 'og ma na shel dkar gyi phreng ba 'dzin pa/ g'yon gyi 'og ma na pad ma dkar po bzung nas snyan gyi thad du kha phye ba/ mtshan dang dpe byad kyis brgyan pa/ rin po che'i rgyan du mas spras pa/ dar sna tshogs kyi na bza' gsol ba/ sku mdog gangs ri'i phung po la nyi ma shar ba lta bur yod pa/ ri dwags e ne (*GLR* (2): na) ya'i pags pa phrag pa g'yon pa la bkal nas nu ma bkab pa/ ral pa'i zur phud lnga dang ldan zhing rin po ches dbu brgyan pa/ zhal 'dzum zhing yid du 'ong ba/)(*GLR* (1), p. 25; *GLR* (2), pp. 36-37).

一方、以上のような姿の四臂観音は、*SM*(1) no. 6「聖六字大明成就法」に、本尊として次のように述べられている。原文は、最初に梵文を、その後にチベット語訳を掲載した。（以下同）

> 「[行者は] そ［のフリーヒの文字］より変わった、一切の飾りに荘厳され、白色であり、四臂を具え、左手に蓮華を持ち、右手に数珠を持ち、他の二つの手が胸の上で虚心合掌 [4]する世自在の姿をもつものを自分自身であると瞑想すべきである [5]」（佐久間, 2011, p. 341）。

(tatpariṇatam ātmānaṃ lokeśvararūpaṃ sarvālaṅkāra-bhūṣitaṃ śuklavarṇaṃ caturbhujaṃ vāmataḥ padmadharaṃ dakṣiṇato akṣasūtradharaṃ aparābhyāṃ hastābhyāṃ hṛdi saṃpuṭāñjalisthitaṃ dhyāyāt//)(*SM* (1), pp. 26-28; *SM* (2), p. 67).

(de yongs su gyur pa las bdag nyid ’jig rten dbang phyug gi gzugs/ rgyan thams cad kyis brgyan pa/ sku mdogs dkar ba/ phyag bzhi pa/ ral pa’i cod pan ’chang ba/ g’yon pa padma bsnams pa/ g’yas kyi bgrang phreng ’dzin pa/ phyi ma’i phyag gnyis kyis snying gar thal mo sbyor zhing ’dzin pa/ ’od dpag tu med pa’i ral pa’i dbu rgyan can no//)(*SM* (2), 4.1. (T2), p. 193).

この成就法では、行者は本尊に加え、本尊と同様の姿をしたマニダラ（maṇidhara）（宝珠を持つもの）と六字真言の女神化である六字大明（ṣaḍakṣarī-mahāvidyā）とを、脇侍として本尊の右と左に観想する。本尊の観音としての名称は、この成就法の名称から、「聖六字大明[世自在]」と考えられる。また、これらの本尊と両脇侍と類似する諸尊が、*SM*(1) no. 11「六字大明世自在尊の説明として伝承された成就法儀軌」にも説かれており、本尊の名称は「六字大明世自在」（本稿では、以降「六字観音」と表記）として同定できる。

以上の *GLR* 第 4 章と *SM*(1) no. 6 「聖六字大明成就法」における観音の表象とを比較すれば、基本的特徴において類似点を見出すことができる。例えば、四臂を有し、その中の二臂は合掌し、右手に数珠、左手に蓮華を持つことである。このように、*GLR* 第 4 章においてインドの六字観音が受容されているが、その背景として次の理由が考えられる。

インド密教において *SM* の原形（11 世紀後半頃）と推測されている集成が、バリ・リンチェンタク（Ba ri rin chen drag）（1040-1111 年頃）によって『百成就法集』（*sGrub thabs brgya rtsa*）としてチベット語に翻訳された。この集成は、チベット仏教のサキャ派において重視されていた(奥山, 2005, p. 177)。上述の *SM*(1) no. 6「聖六字大明成就法」のチベット語訳（*SM* (2), 4.1.（T2）p. 193）は、その『百成就法集』に含まれており、サキャ派に属するソナム・ゲルツェンは、当然それを知っていたと考えられる。

このように、観音の精髄とされる六字真言の女神化である六字大明を、さらに観音として尊格化した六字観音がインド密教において成立した後、六字観音の成就法類がチベット語訳されてサキャ派に浸透し、さらに、ソナム・ゲルツェンによって、チベットを教化する観音の表象として、*GLR* 第 4 章に導入されたものと考えられる。

一方、*SM* の六字観音の成就法類（*SM* (1), nos. 6, 7, 11, 12; *SM* (2), 4. 1-4. 4）には、*GLR* 第 4 章が説くように、観音が阿弥陀浄土に化生するという記述はみられない。このような *GLR* の記述には、浄土教の影響がみとめられる。例えば、「浄土三部教」の一つ『無量寿経』では、観音は、次のように述べられている。

「『……また、実に、アーナンダよ、かの仏国土において、声聞[6]たちは、一ヴィヤーマ[7]の光明をもっており、菩薩たちは、――かの世界を、その光明によって絶えず常に光耀で満たしている二人の菩薩を除いて――十万・千万ヨージャナ[8]の光明をもっているのである』。そのとき、尊者アーナンダは世尊に対してこう言った。『世尊よ、その善き人である二人の菩薩・大士の名は、何というのでしょうか』。世尊は言われた。『アーナンダよ、その中の一人は、アヴァローキテーシュヴァラ（観自在）[9]菩薩・大士であり、第二の人は、マハー・スターマ・プラープタ（大勢至）と名づける。アーナンダよ、[この二人は] この仏国土より、死没して、かしこ[10]に生まれたのである。……』。」（藤田, 2015, pp. 135-136）。

(tasmin khalu punar ānanda buddhakṣetre ye śrāvakās te vyāmaprabhā ye bodhisattvās te yojanakoṭīśatasahasraprabhāḥ sthāpayitvā dvau bodhisattvau yayoḥ prabhayā sā lokadhātuḥ satatasamitaṃ nityāvabhāsasphuṭā/ atha khalv āyuṣmān ānando bhagavantam etad avocat/ kiṃ nāmadheyau bhagavaṃs tau satpuruṣau bodhisattvau mahāsattvau/ bhagavān āha/ ekas tayor ānandāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvo dvitīyo mahāsthāmaprāpto nāma/ ita evānanda buddhakṣetrāc cyutvā tatropapannau)(*Sukh* p. 59).

(kun dga’ bo sangs rgyas kyi zhing de na nyan thos gang dag ’khod pa de dag ni ’od ’dom gang ba sha stag go[11] / byang chub sems dpa’ gang dag ’khod pa de dag ni ’od dpag tshad bye ba brgya stong pa sha stag ste byang chub sems dpa’ gang ’od

kyis ’jig rten gyi khams de rtag tu rgyun mi ’chad par khor yug du snang bas khyab par byed pa gnyis ni ma gtogs so// de nas bcom ldan ’das la tshe dang ldan pa kun dga’ bos ’di skyad ces gsol to// bcom ldan ’das byang chub sems dpa’ sems dpa’ chen po de gnyis kyis ming ci zhes bgyi/ bcom ldan ’das kyi bka’ stshal pa/ kun dga’ bo de gnyis la gcig gi ming ni byang chub[12] sems dpa’ chen po spyan ras gzigs dbang phyug ces bya’o// gcig gi ming ni mthu chen thob ces bya ste/ kun dga’ bo de gnyis ni sangs rgyas kyi zhing ‘di nas shi ’phos nas sangs rgyas kyi zhing der skye so//)（*Sukh* (T), p. 296）.

以上のように、多くの菩薩たちの中でも、観音は大勢至とともに阿弥陀の浄土を絶えず光で満たしている卓越した特別な菩薩とされる。一方、*GLR* 第 4 章に述べられる観音の出現方法である「蓮華化生（蓮華における化生）」が、『無量寿経』では次のように説かれる。

「世尊は言われた。『アジタよ、他のもろもろの仏国土に住している菩薩たちが、極楽世界に生まれることに疑いを起こし、その心をもってもろもろの善根[13]を植えるならば、かれらにとって、ここには［諸蓮華の］内奥の住処がある。しかし、疑うことなく、疑惑を断ち切って、極楽世界に生まれるためにもろもろの善根を植え、仏・菩薩たちのとらわれのない智を信頼し、信じ、信解するならば、かれらは化生して、諸蓮華の中に結跏趺坐して現れる。アジタよ、菩薩・大士にして、他処の仏国土に住している者たちが、アミターバ如来・応供・正等覚者にまみえるために心を起こし、疑いを起こさず、とらわれのない仏の智を疑わず、また自分の［植えた］善根を信ずるならば、かれらは化生して、結跏趺坐して諸蓮華の中に現れ、寸時に、すでに生まれて久しい他の衆生たちと同じような身体となるのである』。」（藤田, 2015, pp. 156-157）。

（bhagavān āha/ ye te ’jita bodhisattvā anyeṣu buddhakṣetreṣu sthitāḥ sukhāvatyāṃ lokadhātāv upapattaye vicikitsām utpādayanti tena cittena kuśalamūlāny avaropayanti teṣām atra garbhāvāso bhavati/ ye punar nirvicikitsāś chinnakāṃkṣāḥ sukhāvatyāṃ lokadhātāv upapattaye kuśalamūlāny avaropayanti buddhānāṃ bhagavantām asaṅgajñānam avakalpayanty abhiśraddadhaty adhimucyante ta anupapādukāḥ padmeṣu paryaṅkaiḥ prādurbhavanti/ ye te ’jita bodhisattvā mahāsattvā anyatra buddhakṣetrasthāś cittam utpādayanty amitābhasya tathāgatasyārhataḥ samyaksaṃbuddhasya darśanāya na vicikitsām utpādayanti na kāṃkṣanty asaṅgabuddhajñānaṃ svakuśalamūlaṃ cābhiśraddadhati teṣām anupapādukānām paryaṅkaiḥ padmeṣu prādurbhūtānāṃ muhūrtamātreṇaivaivaṃ-rūpaḥ kāyo bhavati tad yathānyeṣāṃ ciropapannānāṃ sattvānām/)（*Sukh,* pp. 68-69）.

（bcom ldan ’das kyis bka’ stsal pa/ mi pham pa byang chub sems dpa’ gang dag sangs rgyas kyi zhing gzhan dag na gnas te/ the tshom du lhung ba’i sems kyis ’jig rten gyi khams bde ba can du skye bar bya ba’i phyir dge ba’i rtsa ba rnams bskyed pa de dag ni de na mngal na gnas// gang dag the tshom med cing som nyi me de ’jig rten gyi khams bde ba can du skye bar bya ba’i phyir dge ba’i rtsa ba rnams bskyed la sangs rgyas bcom ldan ’das rnams kyi ye shes chags pa med pa la yid ches shing dad la mos pa de dag ni padma rnams la skyil mo krung bcas nas brdzus te ’byung ngo// mi pham pa byang chub sems dpa’ sems dpa’ chen po sangs rgyas kyi zhing gzhan na gnas pa gang dag de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa’i sangs rgyas ’od dpag me la blta ba dang/ phyag bya ba dang/ bsnyen bkur bya bar sems bskyed cing the tshom mi bskyed la/ sangs rgyas kyi ye shes chags pa med pa la sam nyi med cing rang gi dge ba’i rtsha ba yang sogs pa de dag ni skyil mo krung bcas nas brdzus te ’byung bar ’gyur te/ ’di lta ste/ dper na/ byang chub sems dpa’ skyes nas ring po ma lon pa gzhan dag dang ’dra bar yud tsam gyis lus rnam pa de lta bur ’gyur ro[14])（*Sukh* (T), p. 310）.

以上の引用箇所では、生類（衆生）の「蓮華化生」が説かれるが、四臂観音、即ち六字観音に相当する密教的観音は説かれていない。しかし、*GLR* 第 4 章では、それが浄土の蓮華に化生するものとして述べられている。従って、*GLR* における四臂観音の「蓮華化生」という表象は、インドにおける密教の要素と浄土教の要素とを折衷したものであり、それはチベット仏教における観音の受容と変容の一端を示すものと言える。

3） 観音の精髄・六字真言の功徳

GLR 第 4 章には、阿弥陀の言葉として、六字真言の功徳が祈願の方法で次のように説かれている。

「チベットの生類が、聖者であるあなた（観音）の姿を見て、六字真言を聞けば、すぐに三悪趣（地獄・餓鬼・畜生）[の境涯] を免れ、善趣の身体を得られるように [願う]。チベットの鬼神、魔物、食人鬼等、生類の精気を奪い、命を絶つもの全てが、聖者であるあなたの姿を見て、六字真言を聞けば、それらの悪心が完全に鎮まり、友愛と憐れみと菩提心が生ずるように [願う]。チベットに生息する虎、豹、熊、雪熊 [15]、凶悪な心をもつ肉食獣、即ち [ある者が] 咆哮を聞くだけで [その者を] 畏怖させ、他の生類の生命を奪い、生肉を食べ、血をすする生類、それらが、聖者であるあなたの姿を見て、六字真言を聞くだけで、どう猛な心が完全に鎮まり、互いを自分の父母のように慈しむように [願う]」（今枝, 2015, pp. 61-62; Sørensen, 1994, pp. 102-103）。

（kha ba can na gnas pa’i sems can rnams kyis/ ’phags pa khyed kyi sku mthong zhing/ yi ge drug pa’i sgra thos nas/ de ma thag tu ngan song gsum las thar te/ bde ’gro mtho ris kyi lus thob par gyur cig/ kha ba can na gnas pa’i ’dre srin dang/ gdon bgegs dang/ sha za la sogs pa/ sems can rnams kyi mdangs ’phrog pa/ srog la bar du gcod pa de dag thams cad kyis ’phags pa khyed kyi sku mthong zhing yi ge drug pa’i sgra thos nas/ gnod pa’i bsam pa rab tu zhi ste/ phan bde dang snying rje byang chub kyi sems dang ldan par gyur cig// kha ba can na gnas pa’i sems can/ stag dang/ gzig dang/ dom dang/ dred dang/ gcan gzan ma rungs pa gdug pa’i sems dang ldan zhing/ ngar skyad thos pa tsam gyis skrag par byed pa/ srog phrogs nas/ sha la za zhing/ khrag la ’thung ba de dag gis ’phags pa khyed kyi sku mthong zhing/ yi ge drug pa’i sgra thos pa tsam gyis gdug pa’i bsam pa rab tu zhi nas/ phan tshun pha ma ltar byams pa la gnas par gyur cig）（*GLR* (1), pp. 26-27; *GLR* (2), pp. 38-39）.

上述の引用箇所における、「六字真言を聞けば悪趣（悪い境涯）を免れる」という功徳は、*KV* にも見出される。そこでは、地獄の生類が六字真言を聞いたり、唱えるだけでも救済されると説かれている（*KV* (3), p. 88, fol. 46b5-8; Mette & Sakuma, 2017, p. xxi）。従って、上述の *GLR* の記述は、この経典の内容を源泉とすると考えられる。

また、上述の引用箇所における「鬼神、魔物、食人鬼や肉食獣の災厄を鎮める功徳」は、『法華経』「普門品」に、次のように説かれている。

「呪文・まじない・薬草・人間に憑く鬼霊・死体に憑く鬼など、人間の身体を滅ぼすものは、アヴァローキテーシュヴァラ（観自在）を心に念ずれば、それを用いた当人に還ってゆこう [12]。われらの体力をうばう竜やアスラ、人間に憑く鬼霊やラークシャサ（羅刹）どもに囲まれていようとも、アヴァローキテーシュヴァラを心に念ずれば、一本の毛髪さえ害うことはない [13]。鋭い歯と爪をもつ恐ろしい猛獣に囲まれることがあっても、アヴァローキテーシュヴァラを心に念ずれば、それらは忽ちに緒方に逃げ去ろう [14]」（坂本・岩本, 2011, pp. 263-265）。

（mantrā-bala-vidya-auṣadhī bhūta-vetāla śarīra-nāśakā/ smarato Avalokiteśvaraṃ tān gacchanti yataḥ pravartitāḥ//12// saci oja-haraiḥ parīvṛto nāga-yakṣ’asura-bhūta-rākṣasaiḥ/ smarato Avalokiteśvaraṃ roma-kūpa na prabhonti hiṃsitum//13// saci vyāḍa-mṛgaiḥ parīvṛtas tīkṣṇa-daṃṣtra-nakharair mahā-bhayaiḥ/ smarato Avalokiteśvaraṃ kṣipra gacchanti diśā anantataḥ//14//）（*Sp*, pp. 369-370）.

（sngags dang stobs dang sman dang rig sngags dang// ro langs pa dang ’byung po lus ’jigs pa// spyan ras gzigs kyi dbang po dran na ni// gang nas rab tu btang ba de slar ’gro//[12] gnod sbyin lha min ’byung po klu ’bar ba// mdangs ’phrog pa yis yongs su bskor na yang// spyan ras gzigs kyi dbang po dran na ni// ba spu’i khung tsam gtses par yong mi nus//[13] mche ba sen rnon rab tu ’jigs pa yi// gcan gzan ma rungs pa yis bskor na yang// spyan ras gzigs kyi dbang po dran na ni// myur bar phyogs kun tu yang ’gro bar ’gyur//[14]）（*Sp* (T), p. 450）.

以上の引用箇所において、「観音を心に念ずること」が「鬼神、魔物、食人鬼や肉食獣の災厄を鎮める」条件として説かれるが、上述の *GLR* 第 4 章の場合には、その

条件が「六字真言を聞くこと」に置き換わっている。このように、*GLR*では、『法華経』「普門品」に説かれる観音の現世利益の功徳が取り入れられ、それを得る手段として六字真言という密教的要素が付加されている。

また、*GLR*では、阿弥陀仏が六字真言の功徳について次のように説くことが述べられている。

「[六字真言を] 念じるだけでも、雪が陽の光に当たって溶けるように、はるか昔から積んだ悪いカルマ（行為）による一切の罪と障害が清められ、極楽浄土に生まれるだろう」（今枝, 2015, pp. 64-65; Sφrensen, 1994, p. 104）。

（dran pas kyang/ gangs la nyi ma phog dang ’dra ste/ tshe thog ma med pa nas bsags pa’i las ngan gyi sdig sgrib thams cad dag nas/ bde ba can du skye bar ’gyur ro/）（*GLR* (1), p. 28; *GLR* (2), p. 41）.

以上の引用箇所における六字真言と極楽往生との関係は、*KV*にも次のように説かれている。

「そ［の観音］の六字大明（六字真言）の名を祈念する者たち、[彼らは]その毛孔に生まれる。まさに再び、輪廻において流転しない」（Studholm, 2002, p. 140）。

（ye ca tasya ṣaḍakṣarīmahāvidyānāmānusmaranti, tadā teṣu romavivareṣu jāyante/ na ca punar eva saṃsāre saṃsaranti/）（*KV* (1), p. 67; *KV* (2), p. 292; *KV* (3), p. 82, fol. 45a4-5）.

（de dag de’i yi ge drug pa’i rig sngags kyi ming gi rjes su dran na de’i che ba spu’i khung bu de dag tu skye’o// slar ’khor bar mi ’gyur ro//）（*KV* (T1), fol. 255b3-4; *KV* (T2), fol. 229b2-3）

上述の引用箇所では、六字真言を祈念することによって、観音の毛孔に転生することが説かれる。*KV*では、その毛孔において生類は教化され、さらに阿弥陀仏の極楽浄土へ行くことが、以下のように述べられている。

「観自在（観音）菩薩摩訶薩は、神変を現す。百千コーティ・ニユタの無数の菩薩たちを成熟させ、それらの生類たちを悟りの道に安立させる。安立させた後、極楽浄土に導く。阿弥陀如来の近くで法を聞く」（Studholm, 2002, p. 138）。

（avalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattvaḥ prātihāryāṇi samupadarśayati/ anekāni ca bodhisattvakoṭiniyuta-śatasahasrāṇi paripācayati sattvāṃśca tān bodhimārge pratiṣṭhāpayati/ pratiṣṭhāpayitvā sukhāvatīlokadhātum anugacchati/ amitābhasya tathāgatasyāntike dharmam anuśṛṇoti//）（*KV* (1), p. 63; *KV* (2), p. 290; *KV* (3), p. 74, fol. 42a5-7）.

（byang chub sems dpa’ sems dpa’ chen po ’di ni cho ’phrul bsam gyis mi khyab pa dag ston to// sems can bye ba khrag khrig brya phrag stong du ma dag yongs su smin par byed do// de dag thams cad byang chub kyi lam la ’jog go// bzhag nas bde bcan gyi ’jig rten gyi khams su ’gro zhing de bzhin gśegs pa snang ba mtha’ yas pa la chos nyon to//）（*KV* (T1), fol. 253a8-253b2; *KV* (T2), fol. 227b1-3）.

上述の引用箇所では、観音の毛孔に生まれた生類が、阿弥陀の浄土に転生することが説かれている。従って、*KV*によれば、生類は、六字真言によって、観音の毛孔を経て阿弥陀の浄土に転生できると考えられている。このように、*GLR*における「六字真言の功徳によって極楽往生する」という思想は、*KV*を源泉とすると考えられる。

さらに、*GLR*では、阿弥陀仏による六字真言の功徳の説明が次のように述べられる。

「この六字真言を、宝石か、布か、紙か、樹皮か、あるいは地面や石などに記せば、八万四千の教えを書写させたのと同じであって、今生において安楽を享受して、即身成仏するという果を得るだろう」（今枝, 2015, p. 64; Sφrensen, 1994, pp. 104-105）。

（yi ge drug pa ’di/ rin po che ’am/ ras sam/ shog gu ’am/ shing shun nam/ tha ma sa dang/ rdo la sogs pa la bris na chos kyi phung po brgyad khri bzhi stong ’bri ru bcug pa yin te/ tshe ’dir bde skyid la longs spyad nas/ tshe gcig lus gcig la sangs rgyas pa’i ’bras bu thob par ’gyur te/）（*GLR* (1), p. 28; *GLR* (2), p. 41）.

上述の引用箇所には、「六字真言の功徳によって即身成仏する」という思想がみとめられる。このような考え方は、*KV*にも、次のように述べられている。

「ある善男子、もしくは、善女人がこの六字大明（六字真言）を唱えると、その人は尽きることの無い弁才をもつものとなる。（中略）それらの［六字大明を唱えた］すべての人々は不退転の菩薩となる。直ぐに最上の正しい悟りを悟る」（Studholm, 2002, p. 140）。

（yaḥ kaścit kulaputro vā kuladuhitā vā imāṃ ṣaḍakṣarīṃ mahāvidyāṃ japanti so ’kṣayapratibhāno bhavati/ …sarve te ’vaivartikādhisattvā bhavanti kṣipraṃ cānuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbudhyante/）（*KV* (1), p. 68; *KV* (2), p. 293）.

（rigs kyi bu ’am rigs kyi bu mo la la zhig yi ge drug pa’i rigs sngags chen mo ’di zlos pa byed na de ni spobs pa mi zad par ’gyur ro// …de dag thams cad byang chub sems dpa’ ’phyir mi ldog par ’gyur ro// bla na med pa yang dag par rdzogs pa’i byang chub kyang myur du mngon par rdzogs par ’tshang rgya bar ’gyur ro//）（*KV* (T1), fol. 256b2-5; *KV* (T2), fol. 230b1-3）.

上述のごとく、*KV* では、六字真言の功徳として「直ぐに最上の正しい悟りを悟ること」、即ち「即身成仏」が説かれている。功徳を得る方法は、*KV* では「六字真言を唱えること」である一方、*GLR* では、「六字真言を記すこと」であり若干相違するが、両者は六字真言の功徳である点では同じである。このように、*GLR* における「六字真言の功徳によって即身成仏する」という思想は、*KV* を源泉とすると考えられる。

4） 六字真言と灌頂・加持

GLR 第 4 章では、阿弥陀が観音に灌頂と加持を授ける前に、六字真言の字義を説くことが述べられる。灌頂は、元来インドにおける王の即位式で聖水を注ぐ儀礼として行われていたが、後に密教にも取り入れられて、奥義を伝授され得る資格を認める儀礼となった（立川, 2015, p. 552）。また、加持は、一般的には聖性のレベルの高いものから低いものへと力を与えることである（立川, 2015, p. 186）。従って、*GLR* 第 4 章における灌頂と加持は、阿弥陀が観音に対して生類を教化する力を授け、その資格を認めることであると考えられる。換言すれば、上述の釈迦仏の力が阿弥陀を介して観音に再び伝えられるものと理解される。なお、*KV*には、阿弥陀による観音の灌頂と加持は説かれていない。このような灌頂と加持の場面において、六字真言の字義・機能が阿弥陀によって次のように示される。

「オンは神の生死の苦しみを取り除き、マは阿修羅の戦いの苦しみを取り除き、ニは人の生老病死の苦しみを取り除き、ペは畜生の使役の苦しみを取り除き、メは餓鬼の飢えと苦しみを取り除き、フンは地獄の熱と寒さの苦しみを取り除く」（今枝, 2015, p. 65; Sφrensen, 1994, p. 106）。

（oṃ ma ṇi padme hūṃ/ oṃ gyis lha skye ’chi’i sdug bsngal sel/ ma yis lha ma yin ’thab rtsod kyi sdug bsngal ser/ ṇi yis mi skye rgas na ’chi’i sdug bsngal sel/ pad kyis dud ’gro bkol spyod kyi sdug bsngal sel/ me yis yi dwags bkres skom kyi sdug bsngal sel/ huṃ gis dmyal ba tsha grang gi sdug bsngal sel/）（*GLR* (1), p. 29; *GLR* (2), p. 42）.

上述の引用箇所には、六字が各々六道輪廻世界の生類（衆生）の苦しみを取り除くことが説かれるとともに、「下化衆生（げけしゅじょう）」（生類の救済）という観音の菩薩としての職能が表されている。他方、*KV*には、蓮華上如来が、観音に対して次のように懇願する場面が説かれる。

「『私が百千コーティ・ニユタの無数の生類を苦から解き放つ六字大明（六字真言）』を私に授けてください。［そうすれば］それら［の生類］は、輪廻から完全に開放され[16]、直ぐに無上の正しい悟りを得る」（Studholm, 2002, p. 144）。

（dadasva me kulaputra ṣaḍakṣarīṃ mahāvidyāṃ rājñīm yenāham anekasattvakoṭīniyutaśatasahasrāṇi duḥkhāt parimocayeyam/ yathā te kṣipraṃ cānuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyante//）（*KV* (1), pp. 75-76; *KV* (2), p. 296）.

（ngas sems can bye ba khrag khrig brya phrag stong du ma dag des ’khor ba las yongs su thar cing myur du zla na med pa yang dag par rdzogs pa’i byang chub mngon par rdzogs par ’tshang rgya bar bya’o//）（*KV*（T1）, fol. 260b4-5; *KV*（T2）, fol. 234a6）.

上述の引用箇所では、六字真言が生類の苦を取り除き、悟りへ導く機能のあることが述べられている。但し、*KV* には、*GLR* に説かれるように、真言の六字の各々が六道の各々の世界に対応する字義は説かれていない。このように、*GLR* における六字真言の字義の源泉には、*KV* に説かれる六字真言による輪廻からの解放と抜苦の思想があると考えられるが、*GLR* では、さらに各々の六字の字義においてその思想が明確化されている。

これに続いて観音が阿弥陀に灌頂と加持をお願いする際に、その言葉において、さらに六字真言の字義が次のように示される。

「オンは布施の波羅蜜（中略）、マは忍辱（にんにく）の波羅蜜（中略）、ニは持戒の波羅蜜（中略）、ペは禅定の波羅蜜（中略）、メは精進（しょうじん）の波羅蜜（中略）、フンは智恵の波羅蜜（中略）、灌頂と加持を授けてください」（今枝, 2015, pp. 66-67; Sφrensen, 1994, p. 107）。

（oṃ ni sbyin pa’i pha rol phyin//…ma ni bzod pa’i pha rol phyin//…ṇi ni tshul khrims pha rol phyin//…pad ni bsam gtan pha rol phyin//…me ni brtson ’grus pha rol phyin//…hūṃ ni shes rab pha rol phyin//…dbang bskur byin gyis brlab tu gsol//）（*GLR* (1), p. 30; *GLR* (2), pp. 43-44）.

上述の引用箇所において、六字は大乗菩薩の実践徳目である六波羅蜜に各々対応させられるとともに、そこには、「上求菩提（じょうぐぼだい）」（悟りを求めること）という観音の菩薩としての職能が表されている。他方 *KV* には、上述のような六字真言の字義は説かれていないが、六字真言を唱える者の功徳が次のように説かれている。

「ある善男子、もしくは、善女人が、この六字大明（六字真言）を唱えると、（中略）そ［の人］は、大慈悲を具える者となり、毎日、六波羅蜜を実現する」（Studholm, 2002, p. 140）。

(yaḥ kaścit kulaputro vā kuladuhitā vā imāṃ ṣaḍakṣarīṃ mahāvidyāṃ japanti…sa dine dine ṣaṭpāramitāḥ paripūrayati/)(*KV* (1), p. 68; *KV* (2), p. 293).

(rigs kyi bu ’am rigs kyi bu mo la la zhig yi ge drug pa’i rig sngags chen mo ’di zlos pa byed na…byams pa chen po dang snying rje chen po dang ldan par ’gyur ro// de nyi ma re re zhing yang pha rol tu phyin pa drug yongs su rdzogs par ’gyur ro//)(*KV* (T1), fol. 256b2-4; *KV* (T2), fol. 230b1-2).

上述の引用箇所では、六字真言と六波羅蜜との密接な関係性がみとめられる。これは、*GLR* における六字真言の字義の源泉と考えられるが、*GLR* では、さらに各々の六字の字義においてその関係性が明確化されている。

（3）第 5 章の構成とその宗教的・思想的背景

1） 第 5 章の構成

概略は次の通りである。観音がチベットの生類利益のために誓願を立てる。そして、六道輪廻世界の生類を救済した後、チベットに向かい生類を救済する。そこで地獄のような苦しみを受けていた生類を見た観音は、涙を流した。その右目から流れ落ちた涙は、ブリクティー女神となり、左目から流れ落ちた涙は、ターラー女神となった。前者は、後のソンツェン・ガンポ王のネパール妃・ティツンであり、後者は後の中国妃・文成公主（ぶんせいこうしゅ）であるとされる。次に、観音はチベットのオタン湖に行き、六字真言の教えを説いた。その後、観音は、十一面千手の姿をもつものとなる。

2） 六字真言による六道輪廻世界とチベットの救済

GLR 第 5 章では、六道輪廻世界の救済が、次のように説かれている。

「観音菩薩は地獄に行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、熱と寒さの苦しみを鎮めた。次に、餓鬼の地に行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、飢えと渇きの苦しみを鎮めた。次に、畜生の地に行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、使役される苦しみを鎮めた。次に、人間の

地に行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、生老病死の苦しみを鎮めた。次に、阿修羅の地に行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、言い争いと戦いの苦しみを鎮めた。次に、天の地へ行き、六字真言の教えを説き、生類を繁栄と幸福に導き、死後、他の境涯（輪廻先）に落ちるかもしれないという苦しみを鎮めた」（今枝, 2015, p. 72; Sφrensen, 1994, pp. 111-112）。

（dmyal ba’i gnas su byon/ yi ge drug pa’i chos bshad phan pa dang bde ba la bkod/ dmyal ba tsha grang gi sdug bsngal zhi bar byas/ de nas yi dwags kyi yul du byon/ yi ge drug pa’i chos bshad/ phan pa dang bde ba la bkod/ bkres skom gyi sdug bsngal zhi bar byas/ de nas dud ’gro’i gnas su byon yi ge drug pa’i chos bshad/ phan pa dang bde ba la bkod/ bkol spyod kyi sdug bsngal zhi bar byas/ de nas mi’i gnas su byon yi ge drug pa’i chos bshad/ phan pa dang bde la bkod/ skye rgas na ’chi’i sdug bsngal zhi bar byas/ de nas lha ma yin gyi gnas su byon yi ge drug pa’i chos bshad/ phan pa dang bde ba la bkod/ lha ma yin ’thab rtsod kyi sdug bsngal zhi bar byas/ de nas lha’i gnas su byon yi ge drug pa’i chos bshad/ phan pa dang bde ba la bkod/ lha ’chi ltung gi sdug bsngal zhi bar byas so/）（*GLR* (1), p. 32 ; *GLR* (2), pp. 47-48）.

以上のように、観音が六道輪廻世界に赴き、六字真言を説いて生類を救うことが説かれる。一方、*KV* には、観音が、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天人等の輪廻世界の生類を救う説話が収められており [17]、上述の *GLR* 第 5 章の内容は、*KV* における六道を含む輪廻世界の救済思想を源泉とすると考えられる。但し、*KV* では、これらの輪廻世界において観音が六字真言を説く場面は一箇所のみであり [18]、説話において必ずしも六字真言と輪廻世界の救済とは結び付けられていない。従って、*KV* と比べて、*GLR* 第 5 章では、六字真言による六道輪廻世界の救済の役割がさらに一層強調されている。これは、*GLR* における六字真言の功徳の拡充と言える。

3） 観音の誓願と十一面千手観音の出現

GLR 第 5 章によれば、十一面千手観音の出現の由来について、概ね次のように説かれる。なお、この箇所には六字真言は述べられていないが、六字真言は観音の精髄・象徴であるので、十一面千手観音も上述の四臂観音と同様に、六字真言の表象の一つとみなされる。

観音は、阿弥陀仏の前で、チベットの生類が解脱と菩提の道に入るまでは、疲労困憊して楽を得たいという思いが自らに一瞬でも生じるなら、頭が十に砕けて身体も千の破片になっても構わない、という誓願を立てる。その後、観音は、チベットの生類を様々な方法で救ったので大変に疲れたのに加え、チベットの生類のごく一部しか救うことができなかったと思い、しばらくの間、安らぎを得たいと考えた。その時、自らが立てた誓願の力によって、頭は十に砕け、身体は千の破片となってしまった。そこで、阿弥陀仏がそれらの破片を集めたので、十一面千手観音が出現することとなった（*GLR*（1）, pp. 32, 34; *GLR*（2）, pp. 47, 50; 今枝 2015, pp. 71, 75; Sφrensen 1994, pp. 111, 114）。

この話は、『千手経』（Ch.）に由来することが石濱（2010, p. 388）によって指摘されている。しかし、その典拠については詳しく検討されていない。そこで、以下において、原典の当該箇所（漢訳・チベット語訳）を引用する。

「觀世音菩薩重白佛言。世尊我念過去無量億劫。有佛出世。名曰千光王靜住如來。彼佛世尊憐念我故。及爲一切諸衆生故。說此廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼。以金色手摩我頂上作如是言。善男子汝當持此心呪。普爲未來惡世一切衆生作大利樂。我於是時始住初地。一聞此呪故超第八地。我時心歡喜故即發誓言。若我當來堪能利益安樂一切衆生者。令我即時身生千手千眼具足。發是願已。應時身上千手千眼悉皆具足」（『千手経』（Ch.）, p. 106b-c）。

（bcom ldan ’das la byang chub sems dpa’ spyan ras gzigs dbang phyug gis yang ’di skad ces gsol to// bcom ldan ’das bdag mngon par dran lags te/ sngon byung ba’i bskal pa ’bum phrag tshad ma mchis pa snyed ’das pa de’i tshe de’i dus na/ mcom ldan ’das de bzhin gshegs pa ’od stong gi rgyal po zhi bar gnas pa zhes bya ba ’jig rten du byung ste// sangs rgyas bcom ldan ’das des bdag dang sems can thams cad la thugs brtse ba’i slad du thogs pa ma mchis pa’i thugs rje chen po rgya cher yongs su rdzogs pa zhes bgyi ba’i gzungs ’di bka’ stsal nas/ phyag gser gyi kha dog can gyis bdag gi spyi bo la byugs te ’di skad ces/

rigs kyi bu khyod kyis (T2 om. kyis) thugs rje chen po'i rig sngags 'di zung shig dang// ma 'ongs pa'i dus na (T2 om. na) ngan pa'i (T1 om. ngan pa'i) sems can thams cad la phan pa dang bde ba chen po byed par 'gyur ro// zhes bka' tshal to// bdag de'i tshe gdod sa dang po la gnas pa las rig sngags 'di lan cig thos pa tsam gyis sa brgyad pa las yang dag par 'das par gyur lags so// bdag de'i tshe de'i dus na sems rab tu dga' zhing mgu bar gyur pa'i slad du smon lam 'di skad du btab lags te/ gal te bdag ma 'ongs pa'i dus na sems can thams cad la smin (T1: sman) cing bde bar bgyid pa'i 'os su 'gyur yang dag pa zhig lags na deng bdag gi lus 'di nyid las lag pa stong dang/ mig stong tshang bar 'byung bar gyur cig ces smon lam btab ma thag tu lus las sug pa stong dang mig stong tshang bar byung bar gyur te/)（『千手経』(T1), fol. 272a1-7; 『千手経』(T2), fols. 95b4-96a2）

以上の引用箇所には、次のような内容が説かれている。

観音（観世音）が仏に以下のように申し上げた。無量億劫の過去（遥かな過去）において、「千光王静住如来」という名の仏が現れた時、その仏が観音と一切の生類のために「大悲心陀羅尼」を説いた。そして、その金色の手で観音の頭を撫でて、「善男子よ、あなたは、この陀羅尼（呪文）を受持して、未来の悪世の一切の生類に利益と安楽を与えるだろう」と言った。観音は菩薩の初地の段階に至り、さらに、この陀羅尼を一度聞いて菩薩の第八地の段階を超えた。そこで、観音は歓喜して、「将来、一切の生類を成熟させ、安楽にさせます。私に千手と千眼が完全に具わりますように」という誓い（誓願）の言葉を発した。まさにその時、観音の身体に千手と千眼が完全に具わった。

これを、上述の *GLR* 第 5 章の内容と比較すれば、共通点と相違点が見出される。共通点として、観音が誓願の力によって、自らの身体に千手が生じたことが挙げられる。一方、相違点として *GLR* には説かれているが、『千手経』(Ch.)（T1, T2）には説かれていないものが挙げられる。即ち、(a) 観音の誓いがチベットと関連づけられていること、(b)「疲労困憊して楽を得たいという思いが自らに一瞬でも生じるなら、頭が十に砕けて身体も千の破片になっても構わない」こと、(c)「しばらくの間、安らぎを得たいと考えた。その時、自らが立てた誓願の力によって、頭は十に砕け、身体は千の破片となってしまった」こと、(d)「阿弥陀がそれらの破片を集めたので、十一面千手観音が出現した」ことが挙げられる。なお、(a) については、石濱（2010, p. 388）に指摘されている。

このように、*GLR* では『千手経』における観音の誓願の話が受容される一方、『千手経』にはみられない内容が付け加えられ、十一面千手観音の出現の由来が、読者に強い印象を与えるように強調されている。これは、著者のソナム・ゲルツェンによる創作であると推測される。

また、十一面千手観音は、*GLR* 第 14 章「ソンツェン・ガンポ王と二人の妃による寺院建立」(*GLR* (1), pp. 110-123; *GLR* (2), pp. 161-180; 今枝, 2015, pp. 228-251; Sørensen, 1994, pp. 251-281)、及び第 17 章「ソンツェン・ガンポ王と妃たちの最後」(*GLR* (1), pp. 141-158; *GLR* (2): pp. 206-236; 今枝, 2015, pp. 282-319; Sørensen, 1994, pp. 313-341)にも、その表象が説かれており、以上の第 5 章の十一面千手観音の出現の話は、本章とその後の観音によるチベット救済を述べた章とを繋ぐ接点となっている。

3．結び

以上のごとく、*GLR* 第 4 章・第 5 章にみられる六字真言の字義・功徳・表象は、『法華経』「普門品」、『無量寿経』、『カーランダ・ヴューハ経』、『サーダナ・マーラー』、『千手経』の諸文献をその成立背景とすると考えられる。そして、これらを源泉として、*GLR* には、四臂観音、蓮華化生、現世利益、極楽往生（阿弥陀浄土への転生）、即身成仏、六波羅蜜、六道を含む輪廻世界の救済、観音の誓願、千手観音といった思想・信仰の諸要素が受容されている。

一方、*GLR* では、これらのインドで成立した思想・信仰の諸要素は、新たな文脈、即ち、釈迦仏の力が阿弥陀を介して観音に伝えられ、さらにそれが観音の精髄である六字真言の力となり、その力が最終的にチベットに及ぶというもの、の中に巧みに組み込まれ、チベットに適応した思想・信仰として昇華されている。

【補注】

1　六字真言は、敦煌出土の 10 世紀頃のチベット語文書にも知られるが（Imaeda, 1979）、チベット仏教文献に集中的に説かれるようになるのは 12 世紀以降であるとされる（Schaik, 2006, p. 67）。また、チベットにおいて 1521 年に初版が出版された『摩尼十万語』（*Maṇi bka' 'bum*）には、観音と六字真言の功徳が大いに宣伝されている（Ehrhard, 2013; 槇殿, 2021）。なお、六字真言が、観音の精髄・象徴であることは、*KV* に、次のように説かれる。「ある時，除蓋障菩薩は世尊にこう言った。（中略）世尊は言った。『善男子よ，かの六字大明(六字真言)は，観自在の精髄だからである。最高の精髄を知るものは解脱を知る』。（中略）これは，観自在のその最高の精髄である（*KV*(1), p. 67; *KV*(2), p. 292）。

2　目録番号は、Lalou（1953）では No.114 であり、芳村（1974）では No. 113 である。

3　目録番号は、No. 75 である（川越, 2005, p. 10）。

4　十指を合わせ両掌の中を少し空けて合掌する手の仕草である（密教辞典編纂会, 1994, p. 609）。

5　チベット語訳（T2）では、「阿弥陀の化仏という編み髪の頭飾りを付けるのである」とある（佐久間, 2011, p. 344, 注(25)）。

6　「[仏の]声を聞く者」を指すが、大乗仏教では、自己の悟りのみを目指す伝統的な部派仏教の修行者を指す（藤田, 2015, p. 194）。

7　ヴィヤーマ（vyāma）は、「両手を伸ばした長さで、漢訳の『一尋』に当たる」（藤田, 2015, p. 227）。

8　ヨージャナ（yojana）は、「一般には約七キロメートル、あるいは十四キロメートルほどに当たるとされる」（藤田, 2015, p. 217）。

9　この場合、梵語に従えば「観自在」の訳語が妥当である。

10　阿弥陀の浄土を意味する。

11　下線部は、*Sukh*（T）に stago（sic.）とある。

12　*Sukh*（T）には sedaṃ 'a（sic.）が挿入される。

13　「よい果報をもたらす善い行い」（中村, 2001, p. 1030）。

14　下線部は、*Sukh*（T）に 'gyuro とある。

15　チベット文には dred とあるが、一般に dred mo と表記され、チベットのアムド地方、もしくはココノール地方に生息する（チャンドラ・ダス, 2012, p. 657）。

16　梵文では「輪廻から完全に開放され」という文言は無い。

17　*KV* では、観音による六道輪廻世界救済は、以下の箇所に説かれる。阿鼻地獄（*KV*(1), pp. 8-12; *KV*(2), pp. 261-263; *KV*(T1), fols. 228a5-230a5; *KV*(T2), fols. 204a1-206a1）、餓鬼（*KV*(1), pp. 12-14; *KV*(2), pp. 263-264; *KV*(T1), fols. 230a5-231a3; *KV*(T2), fol. 206a1-206b5）、畜生（四つ足をもつもの）（*KV*(1), pp. 24-26; *KV*(2), pp. 269-270; *KV*(T1), pp. 236a2-236b4; *KV*(T2), fol. 211b3-212a4）、阿修羅（*KV*(1), pp. 22-24, pp. 26-38; *KV*(2), p. 269, pp. 270-277; *KV*(3), pp. 20-28; *KV*(T1), fols. 235b1-236a2; *KV*(T2), fol. 211a2-211b3）、人間（*KV*(1), pp. 47-59; *KV*(2) pp. 282-288; *KV*(3), fols. 30r1-39r1; *KV*(T1), fol. 245a8-251a8; *KV*(T2), fol. 220a3-225b2）、天人（*KV*(1), pp. 43-45; *KV*(2): p. 280; *KV*(3): fol. 27v2-28v7; *KV*(T1): fol. 244a2-244b6; *KV*(T2): fols. 218b7-219b2）。

18　これは、以下のように、観音が阿修羅王バリに将来、如来になるという授記を与える場面である。「観音は、バリ王の授記を申し出た。『汝、阿修羅王よ、シュリー（吉祥）という名の如来、阿羅漢、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊となるであろう。それらすべての阿修羅たちは、教えを受けるものとなるであろう。そこで、汝の仏国土では、貪の声、瞋の声、痴の声は生じないであろう。六字大明（六字真言）が獲得されるであろう』と」（*KV*(1): p. 35; *KV*(2): p. 275; *KV*(3): p. 26）。

【引用・参考文献】

・略号（一次文献）

GLR(1): Kuznetsov, B. I. (1966). *rGyal rabs gsal ba'i me long* (*The Clear Mirror of Royal Genealogies*): *Tibetan Text in Transliteration with an Introduction in English*. Leiden: E. J. Brill.

GLR(2): bSod nams rgyal mtshan (2015). *rGyal rabs gsal ba'i me long*. pe cin (北京): mi rigs dpe skrun khang (民族出版社).

KV(1): Sāmaśrami, Satyabrat (Ed.) (1872). *Kāraṇḍavyūhaḥ*. Calcutta.

KV(2): Vaidya, P. L. (Ed.) (1961). *Avalokiteśvaraguṇa-kāraṇḍavyūhaḥ* In *Mahāyānasūtrasaṃgraha*. Part 1, Buddhist Sanskrit Texts No. 17. (pp. 258-308) Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

KV(3): Mette, Adelheid (1997). *Die Gilgitfragmente des*

Kāraṇḍavyūha. Indica et Tibetica 29, Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.

KV(T1): （訳者不詳）(1955). *'Phags pa za ma tog bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*. No. 784, chu fols. 224a7-274b4. 西蔵大蔵経研究会（編）影印北京版『西蔵大蔵経』Vol. 30.

KV(T2): Jinamitra, Dānaśīla, & Ye-shes sde (訳) (1980). *'Phags pa za ma tog bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*. No. 116, ja fols. 200a3-247b7. The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gur, sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center, published by Dharmamudranālaya under the direction of Tarthang Tulku. Volume 19, Dharma Publishing: Oakland, 1980.

SM (1): Bhattacharyya, Benoytosh (Ed.) (1968). The *Sādhanamālā*. 2 vols. Gaekwad's Oriental Series Nos. 26, 41, Baroda: Oriental Institute. (Original work published 1925, 1928)

SM (2): Sakuma, Ruriko (Ed.) (2002). *Sādhanamālā: Avalokiteśvara Section, Sanskrit and Tibetan Texts*. Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers.

Sp: Wogihara, U. and Tsuchida, C. (Consultant) (1934/ 1958/ 1994). *Saddharmapuṇḍarīka-sūtram*（改訂梵文法華経）*Romanized and Revised Text of The Bibliotheca Buddhica Publication by consulting A Skt. MS. & Tibetan and Chinese translations*. Tokyo: The Sankibo Buddhist Book Store.

Sp (T): ツルティム・ケサン（白館戒雲）（校訂）(2009). *bod 'gyur dam pa'i chos padma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*（チベット語訳・妙法蓮華経）、日蔵仏教文化叢書 XI、西蔵仏教文化協会

Sukh: Fujita, Kotatsu (Ed.) (2011). *The Larger and Smaller Sukhāvatīvyūha Sūtras, edited with Introductory Remarks and Word Indexes to the Two Sūtras*. Kyoto: Hozokan.

Sukh (T): 河口慧海（訳・校訂）(1972/1991). *'phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*.「蔵和対訳　無量寿経」『梵蔵和英合壁・浄土三部経』(『浄土宗全書　第 23 巻』) (pp. 220-339) 所収、山喜房佛書林

『千手経』(Ch.)： 伽梵達摩(訳) (1928).『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』一巻、高楠順次郎（編）『大正新脩大蔵経』Vol. 20, No. 1060 （pp. 106-111）大正一切経刊行会

『千手経』(T1)：法成（訳）（1956). *'Phags pa byang chub sems dpa' spyan ras gzigs dbang phyug phyag stong spyan stong dang ldan pa thogs pa mi mnga' ba'i thugs rje chen po'i sems rgya cher yongs su rdzogs pa zhes bya ba'i gzungs*. No. 369, ma fols. 270a6-304a8, 西蔵大蔵経研究会（編）影印北京版『西蔵大蔵経』Vol. 20.

『千手経』(T2)： 法成（訳）（1980). *'Phags pa byang chub sems dpa' spyan ras gzigs dbang phyug phyag stong spyan stong dang ldan pa thogs pa mi mnga' ba'i thugs rje chen po'i sems rgya cher yongs su rdzogs pa zhes bya ba'i gzungs*. No. 691, tsa fols. 94a1-129b6, The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gur, sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center, published by Dharmamudranālaya under the direction of Tarthang Tulku Volume 33, Dharma Publishing: Oakland.

・二次文献

[外国語文献]

Ehrhard, Franz-Karl (2013). The Royal Print of the Maṇi Bka' 'Bum: Its Catalogue and Colophon. In Franz-Karl Ehrhard & Petra Maurer (Ed.) *Nepalica-Tibetica: Festgave for Christiph Cüppers*. Band 1, (pp. 143-172) International Institute for Tibetan and Buddhist Studies, GmbH.

Imaeda, Yoshiro (1979). Note préiminaire sur la formule Oṃ maṇi padme hūṃ dans les manuscripts tibétains de Touen-Houang. In Michel Soymié (Ed.) *Contributions aux Études sur Touen-Houang*. (pp. 71-76) Genève-Paris: Libraire Dorz.

Lalou, M. (1953). Les texts bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan. In *Journal Asiatique, 241*, 313-353.

Mette, Adelheid & Ruriko Sakuma (2017). Introduction, *Kāraṇḍavyūha*. In Mette, Adelheid, Noriyuki Kudo, Ruriko Sakuma, Chanwit Tudkeao, and Jiro Hirabayashi (Ed.) *Further Mahāyānasūtras, Gilgit Manuscripts in the National Archives of India, Facsimile Edition*. Vol. II. 4 (pp. xix-xxxiv), New Delhi, Tokyo: The National Archives of India and The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University.

Schaik, Sam Van (2006). The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the

Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In Ronald, M. Davidson & Christian K. Wedemeyer (Ed.) *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in Its Formative Period 900-1400*. (pp.55-72) Leiden: Koninklijke Brill NV.

Sφrensen, Per K. (1994). *Tibetan Buddhist Historiography, The Mirror Illuminating The Royal Genealogies: An Annotated Translation of the XIVth Century Tibetan Chronicle: rGyal-rabs gsal-ba'i me-long*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Studholm, Alexander (2002). *The Origins of Oṃ Maṇipadme Hūṃ: A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. New York: State University of New York Press.

[日本語文献]

石濱裕美子(2010)「特論　ダライ・ラマ十四世」『新アジア仏教史 09 チベット　須弥山の仏教世界』(pp. 381-450)佼成出版社

今枝由朗（監訳）・ソナム・ゲルツェン（著）(2015)『チベット仏教王伝：ソンツェン・ガンポ物語』岩波文庫

岩本裕（1978）『佛教説話の伝承と信仰』佛教説話研究第三巻、開明書院

奥山直司（2005）「7 『サーダナ・マーラー』成就法の花環」『インド後期密教（上）方便・父タントラ系の密教』松長有慶（編著）(pp. 161-186) 春秋社

鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行（編）(1998)『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版

川越英真(2005)『dKar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究叢書 3、東北インド・チベット研究会

久保継成（1987）『法華経菩薩思想の基礎』春秋社

坂本幸男・岩本裕（訳注）(1967/ 2011)『法華経』(下) 岩波文庫

佐久間留理子（2011)『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林

佐久間留理子（2013）「『カーランダ・ヴューハ・スートラ』の翻訳研究（1）—サマスラミ校訂本第一部第二章 —」『東方』*28*, 243-255.

佐久間留理子（2019)「『カーランダ・ヴューハ・スートラ』にみる餓鬼・地獄の救済 — 翻訳研究（2）—」『東海佛教』*64*, 138-148.

佐久間留理子（2021）「『カーランダ・ヴューハ・スートラ』にみるマヘーシュヴァラと生類の救済 — 翻訳研究（3）—」*66*, 91-102.

立川武蔵（2015)『マンダラ観想と密教思想』春秋社

チャンドラ・ダス（1969/ 2012)『蔵英辞典』臨川書店

中村元（2001)『広説佛教語大辞典』東京書籍

中村元・早島鏡正・紀野一義（訳註）(1963/ 2020)『浄土三部経（上)』岩波文庫

中村元・早島鏡正・紀野一義（訳註）（1964/ 2020）『浄土三部経（下)』岩波文庫

野口善敬（1999/ 2000）『ナムカラタンノーの世界：『千手経』と「大悲呪」の研究』禅文化研究所

藤田宏達（訳）(2015)『新訂　梵文和訳　無量寿経・阿弥陀経』法蔵館

密教辞典編纂会（編）（1931/ 1994）『密教大辞典（縮刷版)』法蔵館

槇殿伴子(2021)『チベット建国説話と観自在信仰—『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章」を中心に—』起心書房

芳村修基（1950/ 1974)「The Denkar-ma」『インド大乗仏教思想研究』(pp. 99-199) 百華苑